

社会人ラグビー 応援団奮闘記

萩元 良介（高34回）



●はぎもと りょうすけ

飯田市扇町出身。追手町小から東中。高校時代は物理班。北大法学部卒業後、昭和62年にNTT入社。NTTコミュニケーションズを経て、現在NTTアドバンステクノロジ勤務。小金井市在住。

ラグビーが大嫌いだった

あれは高校時代の冬、運動班の練習跡がガチガチに凍った早朝の体育授業のこと、私は同級生で柔道班・ラグビー班兼務の中村君に強烈なタックルで倒され、トゲトゲの地面であちこち擦り剥いた。その時、ラグビーには金輪際戻るまいと固く心に決めた（はずだつた）。

応援団活動は社会人野球から

時は過ぎて大学を卒業した私は、民営化2年目のNTTに入社した。NTTは電電公社時代から各エリア本部が社会人野球チームを有しており、新入社員はその応援団員として駆り出されるのが習わしだつた。

初任地が松本だった私は、NTT信越硬式野球部応援団に所属。都市対抗野球シーズンが近づくと菅平の保養

所に連行・隔離され、大学応援団経験のある先輩から応援歌・エールなどを叩き込まれた。幸い何度も東京ドームでの応援が叶つたが、まさかこの頃の経験が後々身を助けることになるとは思いも寄らなかつた。

ラグビー応援団を立ち上げろ!?

2008年12月、12年におよぶ子会社出向から復帰した私は、NTTコミュニケーションズ（以下、コム）の関西営業本部（大阪）に組織長として赴任した。

この頃コムは、NTT東日本から受け継いだラグビーチームを母体にシンボルチーム“ShiningArcs（以下、アーチス）”を発足し、トップリーグ昇格に向けて気合が入っていた。東京に応援団はあつたが、まだ有志社員による“私設”的の団体であり、会社補助も極めて限定的だつた。そんなある日、無類のラグビー好きで大学の先輩でも

ある本部長のAさんが「関西での試合は地元メンバーで応援をリードしたい！」と曰^{いわれた。}ボスにして先輩の希望は叶えなければ…と思うのは子分肌の悲しい性である。早速Aさんを囲んで設立総会（という体の飲み会）を開き、アーツ私設応援団関西支部^{（）}を旗揚げした。初代リーダー長に就いた私は、支部長に祭り上げたAさんの威を借り、本部内から社会人野球応援団経験者と若手社員をかき集めて活動を開始した。

その後我々は実戦での応援経験を積みつつ、野球を参考に関西弁ヤジも駆使した「元気過ぎる」応援スタイルを確立していった。そして翌年の2009年、我々の想いが天に通じたのか、ついにアーツは悲願のトップリーグ昇格を果たしたのだった。

応援団副代表に就任

2011年8月、東京に戻った私に、全社応援団の事務方トップである副代表（代表は役員）への就任依頼が舞い込んだ。前季副代表でたまたま同僚部長だったI君から、「近々結婚するので察してくれ…」と泣きつかれたのだ。子分肌に加えて、頼まれると嫌とは言えない親分肌も持ち合わせていた私は彼の懇願を受け入れた。シーズン中、全国行脚で土日のどちらかがほぼ潰れる役回り

は、新婚生活を迎えるとする彼にとつては酷だった。

就任後は、信越出身で子会社時代から旧知のリーダー長T橋君（大学応援団OB）と二人三脚で、既に40名を越えようとしていた応援団の運営にあたった。華々しくプロ化したサッ

カーに比べて社会人ラグビーはマイナーだったが、2015年のワールドカップにおける日本代表の大活躍がファン層の急拡大をもたらした。一方、依然紳士のスポーツを標榜するラグビー協会と古くからのファンは、野球のようなヤジや鳴り物を使つた応援を快く思わず、次第に規制強化がなされていった。

我々はこの時期を「社会人ラグビーが一企業のシンボルから幅広いファンに支えられる存在へとステップアップするための過渡期」と捉え、試行錯誤を重ねていった。アーツ

応援団の活性化にチャレンジ！

社会人ラグビーを取り巻くこのような環境の激変ぶり、またトップリーグにおけるアーツの躍進を受け（最



秩父宮で見得を切る応援団3役=左から萩元（副代表）、S常務（代表）、伊那北（OB）、T橋君（リーダー長）

高5位／18チーム）、トップを狙うチームの応援団として相応しくあらねばと、会社公認となつた組織の活性化に努めた。中でも貴重なプライベート時間を削って東奔西走する団員のモチベーション向上には心を配つた。

節目には、チームオーナーであり酒好きな社長や、現役選手・OBらにも声掛けして懇親会を開催し、年齢・職場や役職はおろか国籍さえも異なる団員相互の交流に努めた。仲のいい選手や関係者から集めたお古のジャージ類を争奪するジャンケン大会は大いに盛り上がつた。

地方遠征では、試合終了後から帰京までの限られた時間に祝勝会（時に残念会…）をねじ込み、ご当地の酒肴に舌鼓を打ちつつ、あーだこーだと試合を振り返りながら次節に向けたエネルギー充填の機会とした。

変わったところでは、労働組合と交渉して協賛（ビールや乾き物等）を取り付け、開幕直前の終業後に組合×応援団×選手OB合同で一般社員向けのラグビールール講習会（OBによる実演付き）を開催したことも。

このあたりのプロデューサー的役割には、亡父譲りのお祭り屋気質が奏功したのでは…と思つてゐる。

ラグビー選手との交流

選手との思い出を少しだけ紹介しておきたい。



株式会社NECグリーンロケッツの細田佳也選手（高58回）と



アーツス壮行会で日本代表ジャージを着たアマナキ選手と

最後は母校OBから、NECグリーンロケッツのフランカーとして現在も活躍する細田佳也選手（高58回）。

まずは早大出身のフッカー、須藤拓輝（すとう・たくる）（タックルから）選手（現在は社業に専念）。職場が同じで懇意にしていたが、早大時代の同期が飯田高校ラグビー班OBだった縁で何度も来飯しており、「中央通りの徳山で焼き肉を食べた」などと聞いて更に距離が縮まり、飯田のリングを合宿所に送つたりもした。

次に、アーツス初のワールドカップ日本代表、トンガ出身のナンバーワイト、アマナキ・レレイ・マワイ選手（現在キャノンイーグルス）。

2015年イングランド大会での南アフリカ戦最終盤に劇的な逆転決勝トライを演出したファイジカルモンスターだ。ノーサイド直後の深夜3時5分、ウルウル眼でメールを送つたところ程なくして返信があり、それを読んでまた涙・涙…。

最後は母校OBから、NECグリーンロケッツのフランカーとして現在も活躍する細

宮での試合の合間に先輩面して声をかけ、フェンス越しに撮つてもらつたツーショットは宝物だ。

副代表から末席団員に

2017年6月末のコム卒業（＝現役引退）と同時に、私は5季務めた副代表を辞した。壮行会に際しては、団員や選手・OB諸氏、そしてあのAさんからも、心の込もつたプレゼントやビデオメッセージを贈られ、大きな充実感と一抹の寂しさを味わつた。

現在はコムグループを離れてNTT持株子会社の禄を食んでいるが、なおアーケス応援団名簿の末席に名を連ね、老害にならないよう大人しく後輩を見守つている。



副代表退任時の贈り物

タックルを物ともせずにボールを前へとつないだり、倒されてもすぐに起き上がって戦列復帰しようとする様子などをバックスタンド最前列で目の当たりにしているうちに、応援する我々が『君たちも負けずに頑張れ！』といつも逆に鼓舞されているような気持ちになつた。そうして私は、ラグビーとそれを応援することの魅力、喜びにどっぷりと浸ることになつたのだつた。

やつぱり、ラグビーが…

2003年から18シーズン続いたトップリーグは、今季NTTがタイトルパートナーとなり「NTTジャパンラグビーリーグワン」として生まれ変わつた。ところが悪夢の5月29日、何とアーケスは入れ替え戦に敗退し、来季はディビジョン2（2部）スタートに…。

勝負の世界は結果が全てなので仕方がないが、形はどうあれ、私は今後とも人生の一時期を支えてくれたラグビーのファンとしてまた応援団として、まずはアーケス改め、『浦安ディーロックス』のディビジョン1復帰、そして飯田高校ラグビー班並びにOB選手の活躍を祈念し、陰に日向に熱い応援を続ける所存だ。

選手を応援するのは我々なのだが、山のような相手の

やっぱり、ラグビーが大好きだ！

応援する我々が逆に…：

コムがラグビーチームを持つに至つたのは、ラグビーを通じて選手が体現する姿が、「つなぐ、つなぎ続ける」というグローバル通信キャリアとしての使命（＝矜持と言つてもいい）に通じるものがあるからだ。